

ゲタチュウ・ハイレ、W. F. マコンパー編

エチオピア写本カタログ

石川 博 樹

現在のエチオピア連邦民主共和国の中部から北部にかけて居住するアムハラ族とティグレ族は、4世紀にキリスト教を受容して以来一貫してそれを保持するとともに、紀元前5世紀頃から現在に至るまで文字史料を残し続けてきた。エチオピアからは18世紀から20世紀前半にかけて多くの写本がヨーロッパに持ち去られたが、パリの国立図書館や大英図書館等に収められたこれらの写本については、整理とカタログの作成が進められ、その内容はかなり明らかにされている。それに比べて、エチオピア本国における写本の保存状況とその内容についての情報は未だ少ない。そこで本稿では1975年から現在までに10巻が刊行され、なお編纂が継続中である標記のカタログについて、歴史研究への利用の可能性に注目しながら紹介を行いたい。

高名なエチオピア人研究者ゲタチュウ・ハイレ氏が中心となって編纂が行われている本シリーズは、エチオピア国内でマイクロフィルム化された写本を収録している。そもそもこの作業が始められたのは、写本の劣化と散逸を憂えたエチオピア教会のテウォフロス Tēwoflos 大主教が、1970年にアメリカ合衆国のヴァンダービルト大学神学研究所 The Divinity School of Vanderbilt University, Nashville, Tennessee に対して写本保存への協力を要請したことを端緒としている。その後の協議の結果、エチオピア写本マイクロフィルム図書館 The Ethiopian Manuscript Microfilm Library, Addis Ababa (以下 EMLL と略記)、ヴァンダービルト大学神学研究所、セント・ジョーンズ大学のヒル修道院写本図書館 The Hill Monastic Manuscript Library, Collegeville, Minnesota (以下 HMML と略記)の後援で、エチオピア国内に保存されている写本のマイクロ化が、1973年に首都アディス・アババにおいて開始された。この作業で作成されたマイクロフィルムは、まず EMLL に納められ、さらにその複製が HMML に送られている⁽¹⁾。本シリーズはこのようにして HMML が所蔵するに至った写本フィルムを目標化したものである。所収されたフィルムの閲覧は EMLL と HMML の双方で可能であるが、複写については HMML のみが応じている。

では本シリーズの構成とその内容はどのようになっているのか。全体の構成は各巻とも共通しており、巻頭のイントロダクションにおいて、収録された写本の所蔵地や特に注目される写本の紹介等が述べられた後、各写本の書

誌と索引が続き、巻末にはいくつかの写本の写真が付されている。

カタログの主体となる写本の書誌情報としては、EMML における登録番号、所有者（個人または団体）名、所有者の住所、写本の制作年代、内容、及び雑項 *Varia* が共通して記載されている。その他、彩飾画や線画が挿入されている場合にはその箇所が、筆写を行った人物あるいはそれを命じた人物が明らかなきときには、彼らの名が挙げられている。また収録された写本がすでに知られている写本と同一のものである場合には、その旨も記されている。写本の材質、大きさ、フォリオ数、及び1ページあたりの縦段数と行数といった情報は、第1巻から第3巻までは全ての写本について記載されていたが、作業の迅速化を計るため、第4巻から特別な写本を除いて省略されるようになった。

ここで書誌の具体例を1つ挙げておく。(第6巻470-471頁)

EMML プロジェクトナンバー2408

アフアル・バイネ・タクラ・ハイマノト Afar Bāynē Takla Hāymānot 教会所蔵、アンコバール Ankobarr 地方、ショア Shoa 州⁽²⁾

- 1) Ff. 5a-79a : タクラ・ハイマノト伝
- 2) Ff. 79a-83a : 聖タクラ・ハイマノトの聖遺骨搬送についての説教
- 3) Ff. 83b-84b : 福音書選集(マタイ伝第5章第1-18節、ルカ伝第1章第39-56節、マルコ伝第6章第14-33節、マタイ伝第2章第1-15節)
- 4) Ff. 85a-88b : 聖タクラ・ハイマノトの誕生(タフサス月24日⁽³⁾)についての説教
- 5) Ff. 89a-103b : 聖タクラ・ハイマノトが誕生した日の22の奇蹟(中略)
- 8) F. 127a : 聖タクラ・ハイマノトの生涯の年譜

雑項 : (1)聖職者の礼拝と祝祭日の行事の順序 ff. 1a-2b (2)サフラ・セツラセ Sahla Sellāsē 王⁽⁴⁾による土地の授与、及びメネリク 2 世によるその権利の保証と土地の追加 f. 4a (3)所有地からの収入 f. 4b (中略) (9)修道院の名簿 f. 128b

彩飾画 : (1)聖タクラ・ハイマノト f. 3a

装飾見出し : ff. 5a, 85a, 89a, 114a

聖タクラ・ハイマノトの逝去(天地創造紀元6805年ナハセ月24日=西暦1313年8月17日)の546年後、すなわち1859年頃に筆写された。

ここに挙げた写本は、ゲエズ語で書かれ、エチオピアの主要修道院である

ダブラ・リバノス Dabra Libānos を開いた聖タクラ・ハイマノトの伝記を中心として、そこに彼にまつわる奇蹟、彼の誕生などについての説教、及び福音書の選集を加えたものである。この例では約30行にわたって説明が行われているが、1写本あたりの情報は、数行のものから数頁にわたるものまで様々である。なおアムハラ族とティグレ族の言語は、それぞれアムハラ語とティグリニヤ語であるが、両民族は19世紀中頃までアクスム王国の言語であったゲエズ語を書き言葉として用いていた。これまでに本シリーズに収められた写本の大半はゲエズ語で書かれ、アムハラ語のものについてはその旨が注記されている。

次に索引は、写本の制作年代、所蔵場所、主題、そして線画と彩飾画という個別の4項目と総索引から構成されている。第3巻までは、ゲエズ語あるいはアムハラ語タイトルについての索引も掲載されていたが、第4巻から省略されている。

まず写本の制作年代については、写本中の記述から年代を特定できるものについてはその年代、そうした情報のない写本についてもおよその年代が推定されている。これらをまとめると次のようになる。12～13世紀 3点(0.05%)、14世紀 10点(0.2%)、14/15世紀 10点(0.2%)、15世紀 34点(0.7%)、15/16世紀 11点(0.2%)、16世紀 41点(0.8%)、16/17世紀 20点(0.4%)、17世紀 173点(3.4%)、17/18世紀 204点(4.0%)、18世紀 814点(16.0%)、18/19世紀 284点(5.6%)、19世紀 1292点(25.3%)、19/20世紀 448点(8.8%)、20世紀 1755点(34.4%)。このように写本の大半は19世紀と20世紀のものであり、16世紀以前の写本は少なく、特に11世紀以前のものとは皆無である。古い写本が少ない理由としては、単なる散逸だけではなく、アクスム王国の衰退後の混乱、16世紀前半に起きたアフマド・イブン・イブラヒム Ahmad ibn Ibrahim、通称「左利きのグラン」に率いられたムスリム軍の東方からの侵入、さらに南方からの牧畜民オロモ族の進出等によって、写本を所蔵する教会と修道院に大きな被害が出たことが影響していると考えられる。

写本の所蔵場所は、種類別に見ると、教会と修道院 3650点(75.3%)、個人蔵書 741点(15.3%)、在アデイス・アババのエチオピア研究所 Institute of Ethiopian Studies 257点(5.3%)、書店 124点(2.6%)、そしてエチオピア教会大主教蔵書 71点(1.5%)である。これを地域別に見ると、ショア州 2371点(48.9%)、アデイス・アババ 1743点(36.0%)、ウォッロ Wollo 州 719点(14.8%)、エリトリア 4点となる。ショア州内で写本数の多い地方は、アンコバツル Ankobarr 1024点、ダブラ・ベルハン Dabra Berhān 219点、ワラナ・バソ Warānā Bāso 199点、アンゴララ Angolalā 197点であり、

ウォッロ州内では、ヤッジユ Yağgu 399点、ダセ Dasē 176点、アンバッサル Ambässal 103点となっている。アデイス・アババは19世紀末にメネリク 2世によってショア州に建設された近代エチオピア帝国の首都であり、現在に至るまでエチオピアの中心地となっている。ショア州は、ソロモン朝期前半には王朝の中心地となり、ダブラ・リバノス修道院を中心にキリスト教文化が栄えた。16世紀には前述のグランの侵攻とオロモ族の進出によって荒廃したが、19世紀後半にこの州から近代エチオピア帝国を創始したメネリク 2世が登場した。一方ティグレ州とショア州の間に位置するウォッロ州は、16世紀に多数のオロモ族が定着した地域であるが、ザグエ朝の中心地であったラリバラの石窟教会やエチオピアの主要修道院の1つであるダブラ・ハイク Dabra Hayq 修道院などを擁する。

線画あるいは彩飾画の索引からは、約3000点の線画や彩飾画が存在することがうかがえる。題材としては、聖母マリア、聖母子、そして大天使ミカエルなどが上位を占めている。

次に主題の索引の項目は、第1巻から第10巻までの間に若干の異同がある。最新の第10巻では、聖書 Bible、教会法と世俗法 Canon and Civil Law、文法 Grammar、聖人伝 Hagiography、歴史 History、典礼 Liturgy、音楽 Music、詩 Poetry、求道 Spirituality⁽⁵⁾、教義 Theology という分類がなされ、写本数の多い項目はさらにいくつかの小項目に分けられている。写本数の多い項目とそれらの全体に占める割合は以下のとおりである。典礼 (39.3%)、聖書 (25.3%)、聖人伝 (21.8%)、教義 (4.7%)、歴史 (2.8%)、求道 (2.8%)、教会法と世俗法 (1.2%)。ここから本シリーズの写本の95%以上が宗教関係の文書であることが分かる。これは写本の調査対象が主に教会と修道院であること、そもそもエチオピアのキリスト教地帯において文書を残したのが主に聖職者であったことを考えれば当然のことと言えよう。

本シリーズの特色の1つは総索引が非常に詳しいことである。ここには教会・修道院名、地名、そして人名などの固有名詞のほか、宗教用語を含む普通名詞などあらゆる情報が網羅されており、様々な内容の記事が写本中に存在することを窺い知ることができる。その質と量は、第10巻の場合100頁に5000弱の項目が挙げられていると記せば十分であろう。

それでは本シリーズに収録された写本からいかなる研究が可能であろうか。

まず宗教研究の上で有用性の高いものを見ると、『エノク書』(EMML 2080他)、『ヨベル書』(EMML 1163他)といった旧約聖書偽典が目される。これらはゲエズ語訳でしか全貌が知られていないものであり、エチオピア教会のみならずキリスト教の歴史や教義を考える上で、非常に貴重である。ところでエチオピア教会は単性論派に属し、1959年まで大主教はエジプトのコブ

ト教会から派遣されていたが、コプト教会と教義等が完全に一致していたわけではない。さらにその内部においても教義上の問題をめぐってしばしば対立が見られた。本シリーズに収録された多数の典礼、教義、聖人伝関係の写本からショア、ウォッロ両州におけるキリスト教信仰の実態を把握することは、上述のごとく複雑な性格を持つエチオピア教会の研究に大きな貢献をす
ると思われる。

本シリーズ所収の写本の中で、主題索引において「歴史」の項目に分類されているものは177点である。その内訳は、歴史あるいは年代記 77点、暦表 68点、伝記 16点、伝説 9点、その他 7点である。この数字を見る限り、歴史関係の写本の全体に占める割合は非常に低いが、雑項の記事まで含めれば、歴史研究に使用できる情報は飛躍的に増える。

まず歴史史料の中心である年代記を取り上げたい。エチオピアの諸王の年代記は、大別して個々の王について書かれたものと、諸王の治績をまとめたものの2種類があり、主要なものは19世紀末から20世紀前半にかけてヨーロッパにおいてすでに刊行されている。19世紀中頃にエチオピア北部を統一したテウォドロス Tēwoderos 王の年代記 (EMML 1348他) など、本シリーズにも前者のタイプは存在するが、その数はわずかである。後者のタイプでは、バセ R. Basset らが翻訳したもの⁽⁶⁾と同じ種類の年代記が EMML 3081 (アファ・ワルク・ガブラ・セツラセ Afa Warq Gabra Šellāsē 氏所蔵、エントット Entōtto 地区、アデイス・アババ、20世紀) に含まれる。この他、古代から18世紀までの歴史をまとめたEMML1470(エチオピア研究所所蔵、アデイス・アババ、1911-1913年)を始めとする歴史書もあり、それらの中に新しい歴史記述があるのか否かを明らかにすることは今後の課題である。

地方史の分野では、EMML 1411 (エチオピア研究所所蔵、アデイス・アババ、20世紀)におけるゴッジャム州についての記述、また EMML 4740 (ムス・ゼナ・マルコス Muš Zēnā Māreqos 教会所蔵、ワラナ・バソ地方、ショア州、1884年)に収められたグランの侵入時のアブナ・ゼナ・マルコス Abuna Zēnā Māreqos 修道院についての記録のように、王朝の年代記には現われない地方の状況を見出すことができる記事が散見する。また聖人伝の中には、彼らが活動した地域についての歴史的な情報が含まれており、年代記の記述とこれらを総合すれば、より具体的な地方の姿を浮かび上がらせることができるのではないだろうか。100点以上確認できる系譜の中には、王のものだけではなく、地方の有力者や聖職者の系譜も含まれており、地方史研究において利用できよう。

さてこれらの史書とは別に注目されるのが土地関係の文書である。本シリーズ所収の写本には、書誌の例として挙げた EMML 2408のように、雑項とし

て土地の取引に関する文書が登場することが多々あり、その総計は少なく見積もっても500以上にのぼる。例えば、EMML 4906（ガンナト・ギョルギス Gannat Giyorgis 教会所蔵、ダセ地方、ウォッロ州、18/19世紀）の雑項には、土地取引に関する記録と書簡が各々39例、23例挙げられている。またソロモン朝の王からの修道院等への土地授与の記録は、両者の関係を知る上で格好の史料であるが、EMML 3879（エンダファレ・マルヤム Endāfārē Māryām 教会所蔵、アンゴララ地方、ショア州、15世紀）には、エスケンデル Eskender 王（在位1478-1494年）以下4人のソロモン朝の王による土地授与の記録が計14例記載されている。さらに教会や修道院の所有地からの収入のリストも何点か存在する。これらの土地関係文書を詳しく検討すれば、ショア州やウォッロ州における土地制度や権力構造を明らかにすることができよう。

この他に自伝や書簡からは、これまで知られなかった事実が浮かび上がる可能性がある。1例を挙げれば、EMML 3750、3755-3761（マルセエ・ハザン・ワルダ・キルコス Marse'e Ḥazan Walda Qirqos 氏所蔵、エントット地区、アディス・アババ、1932-1935年）は、イギリスとのソマリアにおける国境画定に秘書として参加したマルセエ・ハザン氏の自伝である。ここにはイギリス代表との会議の議事録やアディス・アババとの間に交わされた書簡などが取められており、この分割におけるエチオピア側の事情を知る有力な情報源となる。

現在エチオピアにおいては、支配民族であったアムハラ族中心の従来の歴史像の見直しと新たなエチオピア史の構築が進められており、そのためには史料に基づいた実証的な研究は不可欠である。すでに紹介したように、本シリーズはアディス・アババとその周辺地域に伝存していた約5000の写本の内容や年代を明らかにしており、エチオピアの宗教と歴史についての研究に多大な貢献をした。編纂にあたっての労苦を考慮すれば、第10巻の年代索引における33写本についての記入漏れなど、各巻に散見する若干のミスは取るに足らないと思えるほどである。

本シリーズの刊行は今後も続けられる予定であるが、第10巻までに収録された写本は、エチオピアのキリスト教地帯の南部に位置するアディス・アババを中心とした地方のものだけであり、未だこの国には多数の記録されていない写本が残されている。今後さらにこれらのマイクロ化が進み、ティグレ族の居住するティグレ州や17世紀から19世紀中頃にかけて都のおかれたゴンダール周辺の写本についても同様のカタログが刊行されることを願ってやまない。

註

- 批 (1) 第10巻が刊行された段階で、写本約30点分のフィルムが HMML に未
評 (2) 本シリーズでは、行政区分として「ショア」と「ウォッロ」といった
と 呼称が用いられているが、エチオピア連邦民主共和国の成立後、民族分布
紹 に基づいた新たな地方行政区分が定められたため、現在ではこれらの名称
介 は使用されていない。しかし本稿では、原本の記述を忠実に伝えるとともに、
石 新旧の地名の重複による繁雑さを避けるために、便宜的に旧行政区分
川 (3) エチオピアの暦については、拙稿「エチオピア王国ソロモン朝の衰退
と州統治者」(『史学雑誌』第107編第4号、1998年、32頁)参照。なおゲエズ
語とアムハラ語のローマ字転写は、原本の記載に従った。
(4) ソロモン朝衰退期にショア州に成立したショア王国の王(在位1818-
1847年)で、メネリク 2 世の祖父。
(5) キリスト教徒としての完全さを追及する生活へと誘う書。
(6) “Etudes sur l’Ethiopie”, ed. and tr. R. Basset, *Journal Asiatique*,
Séries 6, Vol. 17, 1881, pp. 315-434 ; Vol. 18, 1881, pp. 93-183, 285-389.

W. F. Macomber, ed., *A Catalogue of Ethiopian Manuscripts Microfilmed for the Ethiopian Manuscript Microfilm Library, Addis Ababa and for the Monastic Manuscript Library, Collegeville*, Vol. I, Collegeville, Minnesota, 1975.

Getachew Haile, W. F. Macomber, eds., *A Catalogue of Ethiopian Manuscripts Microfilmed for the Ethiopian Manuscript Microfilm Library, Addis Ababa and for the Hill Monastic Manuscript Library, Collegeville*, Vol. II-X, Collegeville, Minnesota, 1976-1993.

*本シリーズの第1、2、6～10巻についてはヒル修道院写本図書館から入手できるが、残りの3～5巻は絶版となっており、University Microfilms International, Book on Demand Order Dept., Box 1467, Ann Arbor, Michigan 48106から複製を取り寄せる必要がある。